(明治廿五年三月十一日遞信省認可)　明治二十八年十月十二日　第四千四百九號　(定價金二錢五厘)

時事新報

明治廿八年十月十二日 土曜日
舊暦乙未八月廿四日(壬辰)
日出午前五時四十六分 日入午後五時九分
月出午後一時二十八分 月入午前一時二十九分
滿潮午前十一時五十五分 午後十一時五十分
(西暦一千八百九十五年)
年始より二百八十五日 年末まで八十日

時事新報は全國中紙面の最も廣き新聞紙なり
時事新報には每號詳細なる商況物價の報告あり

時事新報

一國の自衞

目下我國には軍備擴張の議論甚だ盛なり實際の事實にして政府に於ても現に擴張案の調査中なりと云へば來る十一月の議會には必ず其案を提出して滿場一致の可決を見るのみとならん一國に軍備の必要は銘々の住居に戸締りを嚴にし門牆を設けて以て他人の闖入に備ふるに異ならず尋常一樣の事にして敢て怪しむには足らざれども事情を知らぬ外國人などには日本が戰勝の勢に乘じて大に軍備の擴張とは取りも直さず戰爭の用意に外ならず目指す所の敵は何れの國なりやなど忽ち邪推を逞うして耳目を聳つるものなきを保す可らず左りとては俗に云ふ痛まぬ腹を抉らるゝものにして迷惑至極の次第なれば毎度ながら聊か事の眞相を說明して他の安心を促さゞるを得ず抑も我國にて軍艦の製造を急にす可しと云ふ其軍艦は即ち自國の海岸を防禦して國を守るの目的に外ならず之を數字に徴するも甚だ明白にして一點の疑はなき筈なり日本は四面環海の國にして全國の周圍は七千餘里の長きに及ぶ其上に今回臺灣を得たるに就ては海岸線も更に一層の長きを致せり臺灣の周圍は詳細の數を得ざれども大抵九州に等しきものと見て之に澎湖列嶋を加ふるときは海岸線の延長は一千里內外として甚しき間違はなかる可し合計八千餘里の海岸を守るに現在の軍艦にて果して目的を達す可きや否やは明白の數にして何人も直に合點する所なる可し且つ又實際の事實に就て云はんに今回の戰爭中に我軍艦は現役非役を問ふの暇なく既に老朽して實際の用に堪へざるものまでも一切擧て外戰に從事し內地には一隻の警備艦をも留めず海岸の防禦は砲臺と敷設水雷とに依賴したれども夫れとても實際には不充分を免れず全國四面の海岸は恰も明放し同樣の次第にして甚だ危險を極めたりき左れば若しも黃海の海戰にして反對の結果を見たりしならんには實際の成行は想像の限りに非ざるのみか或は彼の南洋艦隊が一擧來襲するみともあらば假令ひ二三隻の小艦にても國中諸處の海岸は恰も敵の砲擊に一任して之を防ぐの術なく看す〳〵非常の損害を受けたりしみとならん現に海岸守備の事に當りし或る士官の談を聞くに戰爭中には南洋艦隊決して來襲の勇氣なし假令ひ來るも之に對するの用意充分なりとて强ひて大言を放て人心を安んぜしめんと勉め副總の友人にさへも實を語らざるみとはなかりしかども砲艦の上より海上を眺めて商船の帆影にても認むるときは敵艦の來襲には非ずやと獨り自から膽を冷したるは毎度のみとにして戰爭終局の其日までは一日も心を安んじたるみとなし其心配は何とも名狀す可らざる程なりしと云へり實際の有樣かくの如き次第なれば海岸防禦の爲めに軍艦の製造は目下の急にして一國の自衞に必要の事なり然らば今日までは何故に之を等閑にし今更らに思ひ立たるやなど云はんかなれども喩へば平生裸體にて寢ぬるの癖を成したるものが一旦風邪の危險に心付きて寢衣を着るの必要を感じたるが如し裸體の不養生を悟りて其癖を改めたるは自家の衞生の爲めにして毫も怪しむに足らず軍艦の製造は今度の戰爭に風邪の危險を感じ更に寢衣を重ねんとするものにして國の衞生上當然の處置なりと知る可し又陸軍の計畫は如何と云ふに殊更らに組織を大にして大に兵力を張らんとするものに非ず本來日本の兵制は全國皆兵の仕組にして年來改良進歩に怠らざれども未だ充分整理の場合に至らず例へば每年徴兵の檢査に合格して徴集に差支なき人員は平均十五萬乃至二十萬の數なれども實際に徴集せられて入營するものは一萬八九千の平均に過ぎず日本の常備兵は每年かくる少數を徴集して實際に差支なきやと云ふに決して然らず只諸般の準備整はざるが爲めに已むを得ず其數に止めたるまでにして今後は次第に增さゞるを得ず例へば北海道の守備の如きも屯田兵のみにて實際に不充分なるは素より明白にして既に師團の組織に改正するみとゝなりたるのみならず殊に臺灣の守備に至りては相當の兵數を要するみと勿論にして今度の計畫は是等の目的に出でたるものなり何れも實際の必要にして殊更らに必要外の擴張を謀るの意味に非ず日本の軍備擴張とは海陸軍共に以上の次第にして一國の自衞上に尋常一樣の事を行ふものに過ぎず斯くまでに打明けたる上は外國の人々も能く其眞相を解して漫に疑念を挾まざらんみと我輩の呉れ〳〵も希望する所なり

雜報

○北清所見

九月廿九日　在北京　松尾久男

◎同龢の進化

北京政府中最も守舊家を以て知られたる翁同龢が總理各國事務衙門に大臣となるに及び其自己の執る處の任務の重大にして困難なるを悟ると同時に稍や開化的動作を喜び勉めて之に倣はんとするものあるが如しとは余の聞々耳にしたる處にしてその總理衙門に大臣たる當時同文館(北京官立の大學)に到りて初めて規模の大なるを知りて驚くと共にその詳細の說明を聞き得て益々改良の實を擧げざるべからざるを悟り更に其規模の擴張を勸誘したりと云ふ尙ほその一昨日を以て我公使館を訪問したる時の如きも用談の終るや我公使に向て日本に於ける敎育の方法、郵便の制度など種々の質問を爲し公使は懇篤に其說明の勞を執りたりと云ふ兎に角北京政府中守舊家の領袖として知られたるの士が斯る開化的事業に付て特に他の說明を請ふに至りしものは偏に我が外交の術に當りて實際的に開化的事業の開發するにあらずんば以て國家の富强を計るべからざるを悟りたるや明白なれども又以て今回の戰敗は如何に支那を刺戟したるやの一斑を知るに足るべきなり

●出使大臣王之春の消息

日清交戰の當時露帝の即位を祝すると稱し露都聖彼得堡(セントピータースブルグ)に使し一時歸途に於て日本人の爲めに殺されたりとの評判高かりし出使大臣王之春は此程無事歸朝し八月三日(清暦)を以て京に到り安を請ふたりしが王の露に使したるもの果して如何なる用務ありてか又如何なる結果を齎し來りたるやは之れを知らずと雖も今日よりして之を見れば果して清國に利益したるものあるか疑はしきの至りなり

●官吏登用の弊害

近來官報を閱するに知府、知州、知縣等が賄賂請託に依りて其官を得るもの多し實官の弊終に無學文盲の士をして地方重要の職に觸らしむるに至ると痛論して上書し或は知州、知府其人を捕へて彈劾すべしとの上奏を見る事等屢なりしが昨(清暦八月八日)發行の官報には浙江道監察御史易俊の官吏登用の弊を論じたる上書一篇を載せりその略に云ふ近來正途の人員壅滯し流品雜り官方漸れ登進の門濫る是れ官無くして試に應ずるもの愈々多きの致す處なり昔は人を需むる事多く故に其試に應ずるもの多きを嫌はず今は承平既に久しく人を要する事急ならず故に課試の法を寬め進士の數を減ずべしと云ふにありとす抑も支那官吏登用の制、皆至りし以來試驗に依りて官を得るもの愈々減ずるは勢ひの已むを得ざる所且しや易俊の上書を實にし進士の數を減ずるに至るも未だ以て官吏登用の法宜しきを得せしむるや難し抑も監察御史の職たる、地方の秕政を擧げ國帝の耳目となりて弊害を未發に防ぐの大任を有するの吏なり故に又稍々事理に通じ時勢を知るの士たらざるべからず而かも今日の場合に於て舊來試驗の法を墨守し僅に其改良の方案として登進の門を開くは進士の數を減ずるにありと唱導するが如きは寧ろ迂濶の沙汰たるを免れず支那が今日の有樣に立至りたるもの其間幾多の原因ありとするも敎育の法其因を爲したる亦必ず少小ならざるべし今に於て官吏登用の制を改め其能く東西の事理に通じ古今の大勢を知るの士は必しも經書の暗誦を[illegible]ざるも之を用ふるに吝ならざれば支那の現勢を改良して文明の實を擧ぐる事到底望むべくもあらず其僅に存する所の電信學校は技手の養成に過ぎず、外國語學校は通辯の養成を目的とし礦山學校、造船學校は礦山技師と船大工の養成を爲し水師學堂は水兵の養成に止まる苟も其上に立つの士能く東西の事に通ぜずんば斯る文明的敎育を受けたるの士も用ふるに處なし況んや四書五經の暗誦と手習とを以て終生の事業となしたるの士は遂に電信の技能に通じ外國語に達し礦山造船の事を解するの士よりも社會の尊重を受けその一旦仕官の途を得るや遂に文明的技能を有するものゝ上に立つ事を得るに於てをや社會既に斯の如し誰か亦進んで功少くして勞多き文明敎育の門に入らんや是れ支那に於て文明敎育の遲々として進まず要路の士概ね頑陋の外一技一能なく徒らに其結果此堂々たる大帝國をして氣息奄々保守の一天張りを以て僅に其國を維持するに至らしめたる所以なり而かも監察御史たるもの僅に進士の數を減ずるを以て官吏登用の一方法として擧々之を說くに至りては支那人が能く文明の曙光に浴するに至るは夫れ果して何の日にある哉殆ど測り知るべからざるなり

○彰化の近信

を追掛けて鹿港に
化に引返したる近
日付を以て彰化よ
第一旅團の砲兵
ども土人の言に依
呉某(我將官相當
りて我軍の動靜
到底策の施すべか
九月十四五日頃)
する敵は優勢なる
きに進みたる砲に
第に增して戰備を
前衞第二旅團の砲
は之に代りて彰化
日鹿港を引き揚げ
前の當地の戰には
と分捕者の模樣を
者は千餘にして殊
數ふべからず殊に
顧みざるのみなら
にして置き去り
手段を用ひ與
ち去りたるを以て
●糧食追給の中絕●
當地より三里餘
れしは敵の一部
たれども糧食の
り是れより先き
に運搬する筈な
の所平生は茫々
漲溢して一面の大
彰化に着する能は
なく所在の南京米
徵發し支那人丸
近頃鹿港より糧
四日本、六南京の
食物と申しては
●臺灣熱の流行●
や熱病非常に流行
十分一もあれ無く
官、看護手に至る
は殆ど(二)人ぬ
だ一回だに罹され
病に罹りたるもの
のあるだけエライ
には殆ど差支なく
し長きも一箇月を
惡るゝに足らず
●斎南の總攻擊●
院に七里程の前方
せり先頭の新聞に
發せし由なれば
きにあるべし今後
徵たる兵士なるそ
の手並は彰化の一
大衆なりとも